

## 4. 総合評価

### 4.1 浅部地盤モデルの信頼性と中央防災会議想定結果

3章で示した本調査結果は、中央防災会議よりも多くのボーリングデータを入手し、また、甲府盆地で250mメッシュ、それ以外で500mメッシュと中央防災会議想定よりも細かいメッシュで地盤分類・地震動評価を実施していることから、全体としてみると中央防災会議想定結果よりも精度・信頼度の高いものと考えられる。しかしながら、本調査結果の基礎資料であるボーリングデータの密度には粗密があり、データ項目の充足度や品質も一様ではない面があり、その影響は浅部地盤モデルで大きいと考えられる。浅部地盤モデルの設定において重要なデータ項目のうち最も不揃いなものは、N値データである。

そこで、ここでは浅部地盤モデルからなるメッシュについて、N値データがあるボーリングを含むエリア（地形・地質の広がりも考慮して）では本調査結果（3章）を採用し、その他のエリアのメッシュについては安全側の観点から、本調査で得られた地震動と中央防災会議想定結果による地震動とを比較して大きい方の値をとって、総合結果とした（計測震度、地表最大加速度、地表最大速度、SI値のそれぞれについて）。

なお、その他、岩盤が地表付近に分布している地域においては、山梨県のボーリングデータや弾性波探査結果をもとに岩盤表層の風化帯を考慮した応答計算を実施していること、500mメッシュと中央防災会議想定よりも細かいメッシュで地盤分類・地震動評価を実施していること、から本調査結果をそのまま採用することとした。

また、液状化危険度についても地震動と同様にして総合評価とした。ただし、2章で液状化評価対象から除外したメッシュについてはここでも液状化対象外とした。

### 4.2 中央防災会議想定結果による地震動の推定

本調査では加速度、速度、SI値も物的被害等の想定的前提としているため、各メッシュで中央防災会議想定結果と比較する際には、中央防災会議想定結果に基づく速度、SI値の値も必要となる。しかし、中央防災会議想定結果では、地表地震動としては計測震度しか公表されていないため、ここでは、中央防災会議想定結果の計測震度をもとに、本調査による計測震度と加速度との関係、計測震度と速度との関係、計測震度とSI値との関係から、それらを求めた。

### 4.3 総合評価

上記の総合結果を、図 4-1~図 4-5に示す。

震度分布の総合結果を大きくみると、ほぼ東西に同レベルで、南が高く、北が低い傾向があり、県南部にあたる南部町及び身延町南部に震度 6 強が、県中南部にあたる南アルプス市、甲府市、笛吹市のそれぞれ南部の地域よりも南側で震度 6 弱が、これらよりも北側で震度 5 強が、北側県境付近で震度 5 弱となっている。これは東海地震震源域からの距離減衰が現れているものと考えられる。ただし、この全体的な傾向よりも、局所的に高い震度を示している地域としては、富士川沿いに震度 7 が、甲府盆地及び富士五湖付近に震度 6 強が、そして釜無川及び笛吹川の上流に震度 6 弱が点在している。これらはいずれも浅部地盤の性状の影響が強いと考えられる地域からなる。

また、地表最大加速度、地表最大速度、及び S I 値の分布をみると、それぞれ東海地震震源域からの距離減衰が現れており、基本的には震度分布とほぼ同様の傾向を示す。

液状化危険度が大きい地域としては、甲府市街地南部と甲府盆地の南部を流下する笛吹川流域及びその北側地域、富士吉田市街地、忍野村市街地、山中湖西岸で目立ち、これらのほかにも笛吹川上流部、釜無川～富士川流域等にも点在する。

なお、上記の地震動・液状化の想定結果について、利用者は次の点に留意されたい。

地震動解析結果は、限られた地質資料に基づいて評価しているため、局所的な地盤条件によっては地震動が変わることがある。同様に、液状化解析結果についても、液状化発生の可能性がない、または解析対象外とされた地域であっても局所的な地盤条件によっては液状化することがある。逆に、液状化の可能性が高いとされた地域でも、実際の地下水位が低い地域では、その可能性が低下することがある。

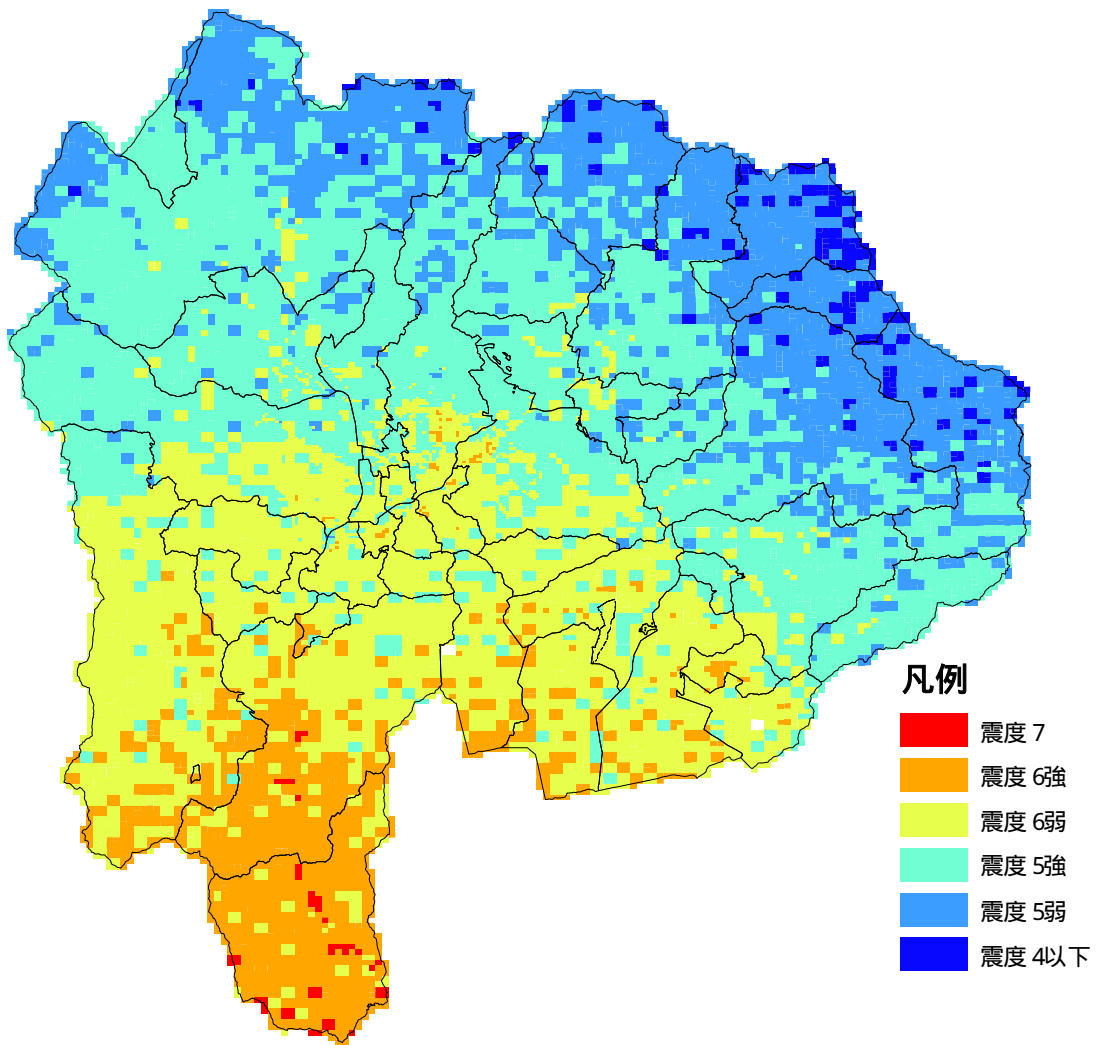


図 4-1 総合評価結果の震度分布図

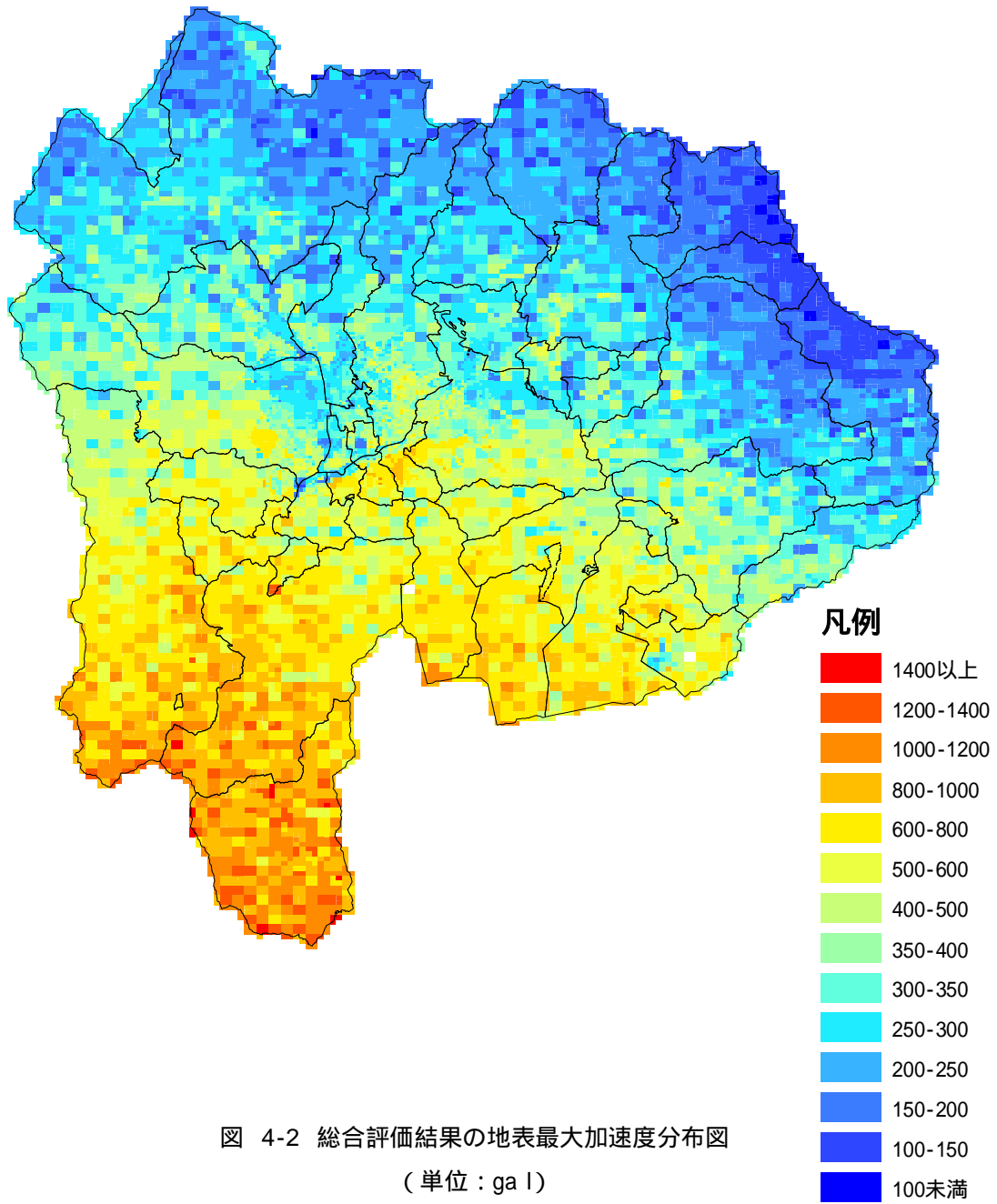


図 4-2 総合評価結果の地表最大加速度分布図  
(単位 : ga l)

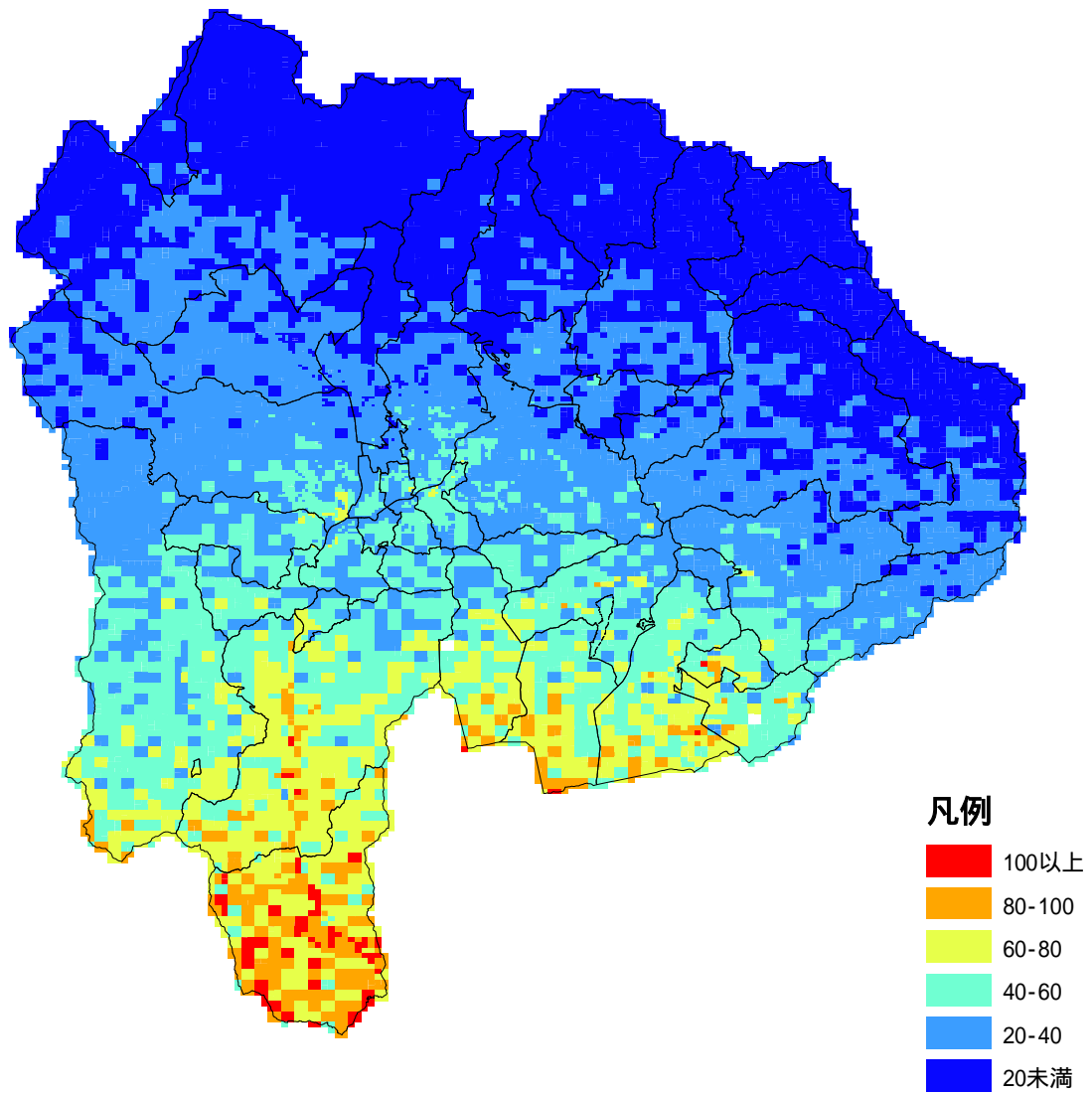


図 4-3 総合評価結果の地表最大速度分布図  
(単位 : cm/ s)

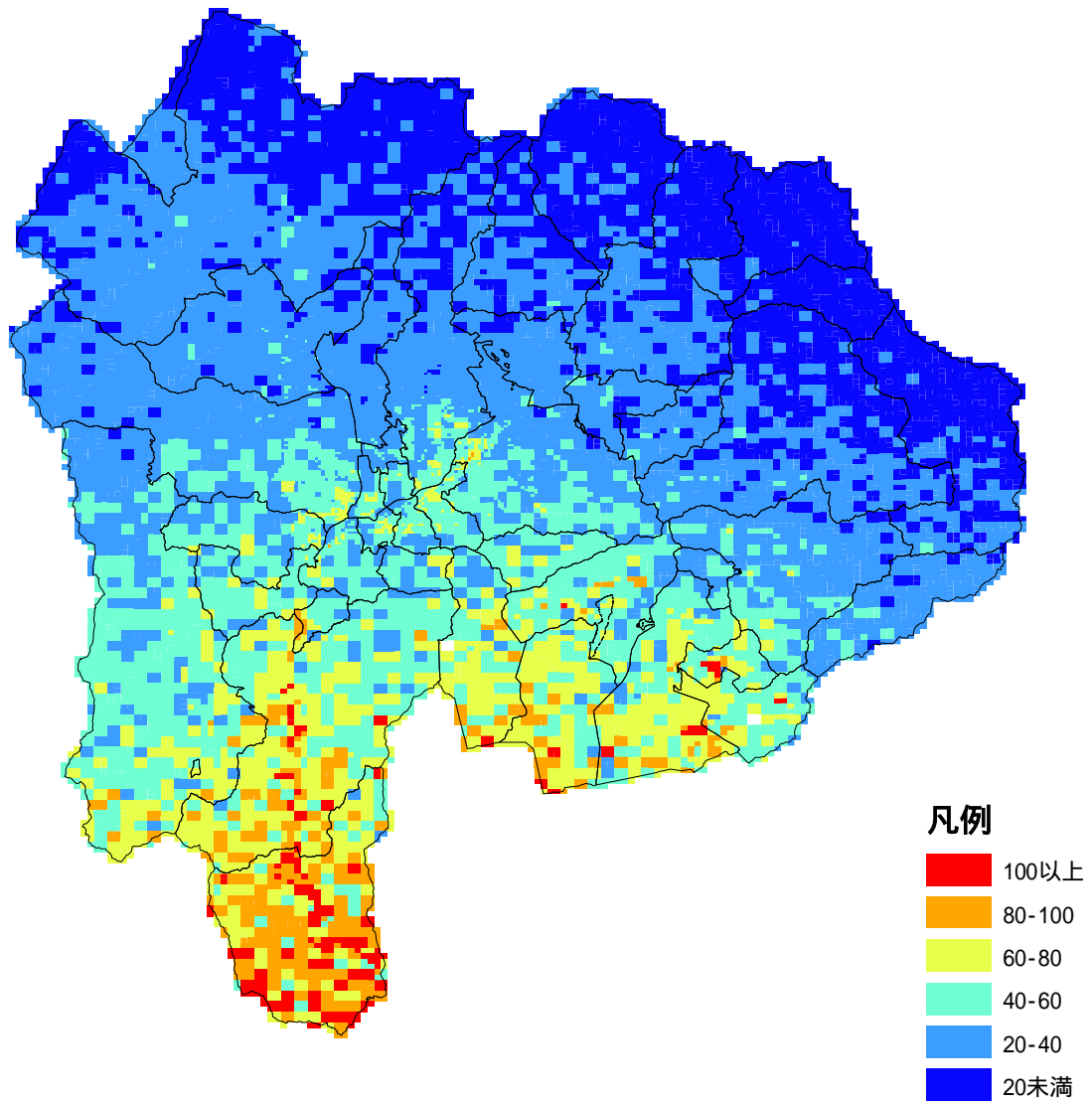


図 4-4 総合評価結果のSI値分布図  
(単位 : cm/ s)

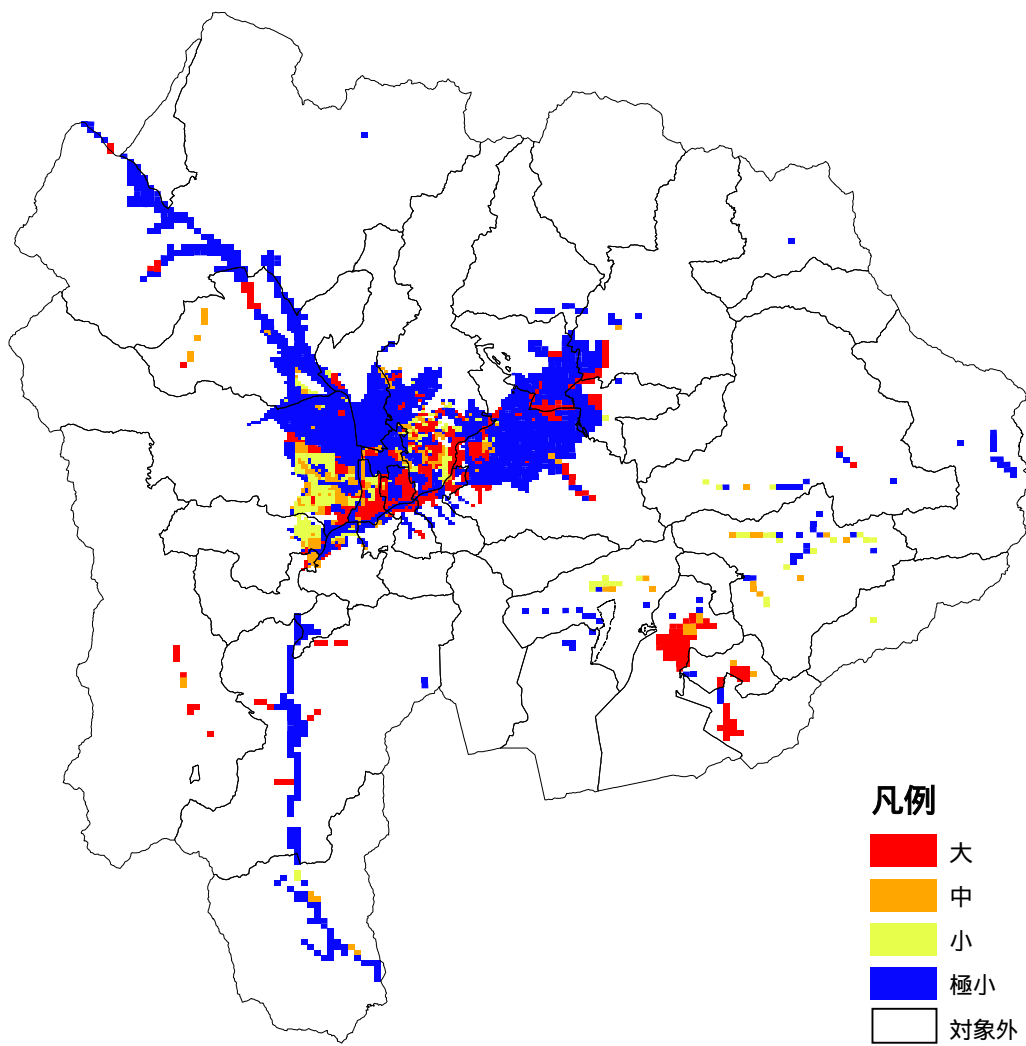


図 4-5 総合評価結果の液状化危険度分布図